

# カスケードに植栽した 熱帯性スイレン

西内 良

## はじめに

本園は熱帯スイレン温室を有し、鮮やかな水辺の花を楽しむことができる。熱帯性スイレンの園芸品種は主に海外で作出されたもので、広い水辺で大輪の花を觀賞することを目的に育種されている。そしてこの育種の流れは今日でも続いている。我が国における熱帯性スイレンに対するイメージは、池やプールなど広い場所が必要で、植物園など特別な施設で觀賞する植物というものが一般的である。しかしながら近年、広い場所をもつ一般家庭が少ない我が国だからこそも言える、スイレン鉢で手軽に花を楽しむための栽培方法を模索する動きや、小型の熱帯性スイレンを育種するという動きが始まっている。

このような背景を受けて、今夏、①スイレン鉢での熱帯性スイレンの栽培例を示すこと、②清涼感を演出すること、以上2点を目的として、カスケードで熱帯性スイレンを展示した。

## 植栽方法

3号～4号ポリポットに株を植栽し、スイレン鉢（直径44 cm、深さ24.5 cm、プラスチック製）に沈めた。水深が株元から水面まで10 cm程度となるように水量を保った。

用土は赤玉土細粒と酸度調整済みピートモスを体積比3:1の割合で混合したものを、練らずに使用した。また、元肥として緩効性化成肥料(N:P:K:Mg = 10:18:7:0.42)を植え込み用ポリポットの底に配置した。

## 展示品種

展示品種を表1に示す。スイレン鉢という狭い環境でも開花しやすい品種を中心に選択した。特に、*Nymphaea micrantha* 系統の品種を多く選択した。この系統は葉上で胎生し、小株を発生することで知られるが、狭い環境においては草体を矮化させて開花する性質がある。これ以降、*N. micrantha* 系統の品種をムカゴ種、それ以外の系統の品種を一般種として表記する。

## 展示期間と展示の流れ

展示は6月中旬から11月上旬まで行った。展示風景を写真1に示す。まず、生産者が温室で栽培しており、導入時に花芽がついていたドーベン、ジョセフィン、ティナ、プリンク、キー・ラルゴ、リンジー・ウッズ、ミロク（写真2）の計7株を先行して展示した。

その後、事前にスイレン温室から子株や脇芽の提供を受けていたムラサキシキブ、プロイデン、セントルイス・ゴールドと、塊茎で維持していたオーバージョイド（写真3）、筆者実生1（写真4）および筆者実生2の計6株を、育苗温室B棟裏で花芽が出るまで栽培し、7月上旬から展示した。

8月上旬からは、ボウフラ対策および更なる清涼感の演出のため、メダカをスイレン鉢に導入した。また、盆明けにオーバージョイドと入れ替える形で、成育の遅れていたキャンディー・レインを展示した。

なお、ラベルに関しては、品種名だけでなく、全ての品種に見どころを記載した。

## 展示の経過

### (1)6月中旬～7月中旬

カスケードに先行して展示した品種群のうち、ドーベン、ジョセフィン、キー・ラルゴ、ミロクは非常に良い開花パフォーマンスを示した。6月から順調に開花し、花が途切れなかった。プリンクについては上記の品種らにはやや劣る花上がりだったものの、十分といえるパフォーマンスであった。ティナ、リンジー・ウッズについては浮葉が当初の想定より大きく育ち、花上がりも想定未満であった。この原因として、窒素過多の状態であった可能性が挙げられる。導入時に新たな用土と肥料を用いて植替えを行ったが、生産者が使用していた肥料が‘まるやま1号(N:P:K=6:4:3)’の大粒と思われるものであった。そのため、窒素分の多い肥料の影響が植え替え後もしばらく残っていたと考えられる。一般に、熱帯性スイレンを睡蓮鉢でコンパクトに育てるためには、使用する肥料はN:P:Kの比が山型のものが適当であるとされている。今回の結果はそれを裏付けるものとなった。

### (2)7月下旬～8月下旬

7月下旬に梅雨が明け、気温が高くなり温度が

安定し始めてからは、全体的に開花が良好な状態が続いた。中でも、ドーベン、ムラサキシキブ、ミロク、筆者実生1は度々2輪咲きがみられた。これらより頻度が少ないものの、キー・ラルゴ、セントルイス・ゴールドも2輪咲きがみられた。

この時期に発生した問題点として、オーバージョイドが鳥に浮葉と花をちぎり取られる被害に逢い、浮葉が2枚を残すのみとなったことが挙げられる。また、この品種はカイノキの陰にちょうど隠れる位置にあり、日照不足にも陥った。その結果、調子を崩し休眠に向かう兆候がみられたため、追肥等での挽回を諦めた。そこで、成育が遅れていたキャンディー・レインの開花が始まったこともあり、場所は悪いものの、この品種をオーバージョイドと入れ替える形で展示した。

8月下旬になると全体的に肥料切れがみられた。越冬は株を休眠させて行うことを予定しており、スムーズに休眠に向かわせるために、早めに肥料を切っておきたいという事情があった。しかしながら、熱帯性スイレンの野外での開花があと1ヶ月は見込めることもあり、ジレンマに陥った。最終的に、全ての株に少量の追肥を行った。

### (3)9月上旬～9月下旬

9月に入り、中旬までは花が途切れない品種が過半数であった。しかしながら、下旬になると花が2日ほど途切れる品種が出てきた。更に、ドーベンとジョセフィンの雄蕊が紫色に、また、ジョセフィンの花弁先がピンク色になる変化が現れた。これは気温が低下したときに *N. micrantha* 系統の白花種あるいは黄花種にみられる現象である。この変化が現れてからも開花自体は続くものの、開花ペースは落ちる。筆者の想定では10月中旬にこの変化が出て、10月末で熱帯性スイレンの展示終了を考えていた。この予定を早め、10月中旬に展示入替えを行う必要を感じた。

### (3)10月上旬～11月上旬

10月に入り、気温低下と肥料切れが進んだ。中旬以降、1週間のうち5日以上開花する品種はドーベン、ムラサキシキブ、ミロクのみとなり、リンジー・ウッズ、ティナは週に3日程度の開花にまで落ち込んだ。この時点で熱帯性スイレンを撤収すべきであったが、最終的な撤収が11月上旬となってしまった

## 結果と課題

今年度、開花パフォーマンスが良好だった品種はドーベン、ムラサキシキブ、ミロク、筆者実生1であり、これらは7月の梅雨明けから9月中旬まで花が途切れず、2輪咲きも度々みられた。また、ムカゴ種を中心に展示を行えば、梅雨明けから9月中旬までの期間は花を途切れさせずに展示することが十分に可能と感じた。

一般の来園者からの話を伺ったところ、ブリソラの透明感のある花色、ムラサキシキブの濃い萼の色、セントルイス・ゴールドの濃い黄色の花色が好評であった。また、スイレン鉢内のメダカも小さな子どもに人気であった。来園者に写真を撮影してもらう機会も多く、スイレン温室で大株を撮影し、カスケードでは花を接写するという、2通りの楽しみ方ができるようになり嬉しい、というお言葉もいただいた。

一方で反省点もあった。まず、脇芽や塊茎から栽培を始めた品種の立ち上げが想定より遅れたことである。原因として、①予備株を含め複数株を同じ容器に沈めており、その結果として過密栽培となり、株元に十分な日光が届かなかったこと、②トラフユスリカの幼虫に浮葉を食害されたこと、の2点が考えられた。容器を増やし幼苗の過密栽培は避けること、こまめな観察によりトラフユスリカの幼虫を捕殺することで対応したい。また、展示株の古葉取りも遅れ気味であった。施肥に関しては、元肥のみで追肥を行わずに1シーズンを過ごす方法を模索し、肥料選択と施肥量調整を行った。しかしながら、7月と8月の高水温期に肥料の溶け出しが早くなりすぎ、幾つかの品種で肥料焼けを起こしてしまった。そのため、展示開始後に1度は追肥を行う予定を組んでいたほうが無難であると考えられた。

## 今後の取組み

来年度は越冬させた熱帯性スイレンを、無加温で立ち上げることを予定している。無理のないスケジュールとして、6月下旬展示開始を想定している。また、今年度に大型スイレン鉢を3鉢受領した。そのため、来年度は温帯性スイレンを含めた大型品種の展示も視野に入れている。

熱帯性スイレンの野外での開花期は、6月下旬から10月中旬までと長い。開花期が長いことと、

容器栽培により展示株の交換が容易であることを活かして、展示期間途中での品種入れ替えも行って行きたい。

#### 追記 熱帯性スイレンの育種とについて

‘はじめに’の項にて、熱帯性スイレンは主に海外で育種され、大型のものが殆どであること、それに対して近年我が国では一般家庭向けにスイレン鉢で栽培しやすい小型品種を育種する動きが始まっていることを述べた。例えば、フォトグラファー兼育種家の加藤宣之氏、神戸どうぶつ王国でスイレンを中心に植物を管理している佐藤泰弘氏、そして両氏に先駆けて個人で育種を行っている中村哲夫氏らの作出品種は既に流通が始まっている。今年度カスケードに展示したミロクは加藤氏の、オーバージョイド、キャンディー・レインは佐藤氏の作出品種である（但し、オーバージョイドは非小型品種）。

現状の小型熱帯性スイレンの育種の方向性を大別すると、① *N. micrantha* 系統を用いて、環境適応能力と繁殖能力に優れたムカゴ種を作出する、② *N. minuta* 系統を用いて低光量でも花芽をつけやすい矮性の一般種を作出する、といったものがある（加藤, 2014）。なお、今年度カスケードに展示した筆者の実生2株は、*N. minuta* に非常に酷似した形質をもつ個体（未同定のため *Nymphaea. sp.* とする）を用いて小型品種の作出を狙ったものである。草体のサイズは目標を達成したものの、改良の余地がある。例えば、花卉幅を広げ丸弁化する、花色を濃くする、あるいはバイカラーにさせる、などの改良を行いたい。また、これから播種したい種子や具現化したい品種イメージもあり、育種に関して実践と観察に力を入れて取り組んでいきたい。

#### 参考文献

加藤宣之. 2014. 育ててみたい美しいスイレン. 70p. 家の光協会, 東京都.

表 1. 展示品種

品種名	花色	花形	葉色	備考
ドーベン	白・花弁先が淡い青	カップ咲き	緑	ムカゴ種
ムラサキシキブ	白・萼が濃紫色	カップ咲き	緑・初期に斑模様が入る	ムカゴ種
ジョセフィン	白	カップ咲き・幅広花弁	緑	ムカゴ種
ティナ	青紫	カップ咲き	緑	ムカゴ種
プリンク	淡い青～紫～白	カップ咲き	緑	ムカゴ種
キー・ラルゴ	ラベンダー	カップ咲き・幅広花弁	緑に褐色の模様	ムカゴ種
リンジー・ウッズ	濃紫でカスリ模様が入る・萼が濃紫色	カップ咲き	緑・初期に斑模様が入る	ムカゴ種
プロイデン	ピンク	カップ咲き	緑	ムカゴ種
セントルイス・ゴールド	黄	スター咲き～平咲き 細花弁	緑・初期に褐色模様が入る	一般種
ミロク	紫	カップ咲き～スター咲き 細花弁	緑	ムカゴ種・国産
オーバージョイド	淡い青	やや平咲き・八重	緑にレンガ色のストライプ	一般種・国産
キャンディー・レイン	淡い青	カップ咲き・細花弁・半八重	緑	ムカゴ種・国産
筆者実生1	赤紫～青紫	カップ咲き	銅	一般種
筆者実生2	青紫	カップ咲き	銅	一般種



写真 1. 展示の様子。全ての品種に解説ラベルを設けた。

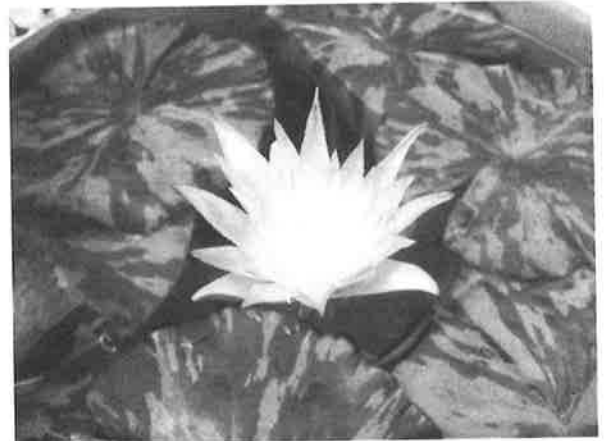


写真 3. オーバージョイド

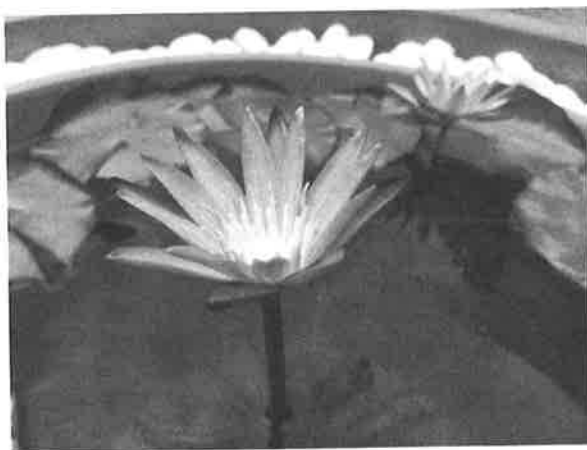


写真 2. ミロク



写真 4. 筆者実生 1